東京大学日本史学研究室紀要　第二十二号　二〇一八年三月

【書評】藤野裕子『都市と暴動の民衆史―東京：一九〇五―一九二三年―』

池田真歩

一

「一九〇五年九月五日、東京の街頭を暴力が駆けめぐった」という印象的な一文から、本書は始まる。日比谷焼打事件として知られ、日露戦争の講和反対集会をきっかけに数万の人々が大なり小なり関与したこの暴動は、以降一九一〇年代末まで十数年にわたって続く都市暴動の季節の幕開けを告げるものであった。本書は、民衆による爆発的な暴力行使という現象の背景と帰結に拘り抜くことで、この十数年について先行研究と大きく異なる世界像を打ち出した研究である。

二〇一五年一〇月の本書刊行以来、学術誌に限ってもすでに六本の書評が公開されており[1]、インパクトの大きさを物語っている。本書の達成と課題は、一連の書評によって様々な角度から総括されている。ここに付け加えられることは決して多くないが、小稿では既出の指摘との重複をなるべく避けつつ、広義の政治史に対する評者の関心に引きつけて所感を述べることとしたい。

二

まず、各章の概要を以下に示す。

序章「都市暴動から何が見えるか」では、当該期の都市暴動の消長とその根源を分析することで、「二〇世紀初頭に日本社会が迎えた一つの大きな転換点」を描き出すという、本書の目的が示され、続いて先行研究整理と分析方法の提示が行われる。先行研究整理の主眼は、普選・労働運動に代表される大正デモクラシーの萌芽段階として都市暴動を位置づける「発展史観」の批判に置かれ、安丸良夫らが牽引した民衆思想史の研究蓄積を中心に、その乗り越えのための方途が探られる。そのうえで分析方法として打ち出されるのは、（一）暴力行使の現場における人々の「行動形態の解明」、（二）都市暴動の「政治運動との関係性の解明」、（三）暴力行使の基盤を用意した「生活文化への着目」、（四）暴力行使の主体がほぼ男性のみであったことと関わっ

ての、当該文化における「男性性への着目」、という四点である。特にこのうち（三）（四）は、「着目」という表現に示されている通り、当該期の都市暴動にふれる研究では採られることのなかった視角であり、本書の独自性が印象づけられる。

第一章「日比谷焼打事件の発生と展開」では、始点たる同事件について、その発生プロセスが綿密に検討される。著者によれば、民衆は暴動のきっかけとなった講和条約反対集会に先立ち、メディアや政治集団が打ち出す反対の論理に収まり切らない解釈を講和問題についてほどこしていた（「露探」レッテルの氾濫ぶりには予想を超えるものがある）。そして集会の当日を迎えると、偶発的な出来事に大きく規定されつつ、暴力の発生・連鎖的な拡大・あっけない収束が生じた。以上の観察にもとづき、近世期の百姓一揆や明治前期の民衆蜂起のような自律性の強い民衆運動とは明らかに異質ながら、確実に民衆の主体性が刻まれた出来事として、著者は焼打事件を位置づける。

第二章「近代都市暴動の全体像」では、日比谷焼打事件に始まり一九一八年の米騒動に終わる、東京で発生した大小九つの暴動の特徴が析出され、次章以降の議論の方向性が定められる。各暴動の契機となった屋外の政治集会の主催者は先行研究が打ち出すイメージに反して多様であり、暴動中核者の多くは、二十代中盤までの独身の男性職人・工場労働者・日雇い雑業層（「男性労働者」と総称される）であった。第三章では前者、第四章以降では主に後者の事実をめぐって、考察が深められていく。

第三章「屋外集会の変転」は、政治運動―屋外集会―暴動という連関が一九〇〇年～一九一〇年代を通じて反復され、一九二〇年代以降に消失していく要因を追った章である。日比谷焼打事件後、屋外集会は暴動発生の可能性につきまとわれることとなる。最初期の主催者が取締の強化を恐れ、屋外集会を避け始めたにもかかわらず、上記の連関がその後も維持されたのは、屋外集会がもつ民衆動員効果、場合によっては暴動を契機とした倒閣可能性に期待を寄せ、他の新興政治集団が集会開催に乗り出したためであった。しかし普選運動が本格化すると、集会の暴動化は運動の正当性を著しく損なうものと見なされ、政治集団は一様にその抑止に努めていく。かくして本章では、民主化の進展と軌を一にした運動の「規律化」により、都市暴動が退場していく過程が、鮮やかに示される。

第四章「労働における親分子分関係と都市暴動」以降、「民衆」という語の指示対象は、徐々に狭義のそれ―若い下層男性労働者―へと絞り込まれていく。屋外集会における人員ないし腕力の調達という、従来見過ごされがちだった事象に着目した著者は、人員調達を可能とした倉庫荷役業や土木建築業の親分子分関係を紐解く。また、土建業界における人員・腕力の調達力は、大日本国粋会のような右翼団体の結成へ向かうものでもあった。都市暴動から普選運動・労働運動へという歴史叙述への異議が、ここにおいても申し立てられる。

第五章「男性労働者の対抗文化」は、「都市暴動のより根源的な要因」を求め、東京に暮らす若い下層男性労働者の日々の暮らしと心性とを焦点化した章である。遊蕩的かつ任侠的な「男らしさ」の価値体系」とでもいうべきものに支えられた彼らの生活実践は、安丸良夫が定式化した「通俗道徳」―勤勉・節倹・禁欲といった、個々人の社会上昇を可能にすると信じられ近代日本社会に深く浸透した規範―のネガであり、構造的に一定数の没落者を生み出しつつその事実を通俗道徳によって塗りこめてしまう社会にあって、没落者自身が育んだ

「対抗文化」であった。ただしこの対抗文化は、下層女性の性を踏み台として成立していたうえ、行論上重要なことには、主流文化のネガである以上、内面化されるほど当人の社会的な孤立を深める作用を有した。後者の矛盾が暴れる身体を通じて噴出したのが都市暴動の場だったというのが、著者の見立てである。

第六章「都市暴動と学歴社会」は第五章と対をなし、主役は男性の苦学生・高学歴労働者・不良学生である。彼らは低学歴労働者と異なり、学歴主義が浸透する社会での上昇階梯を視野に収める存在だったが、経済的困難や既成秩序への反発からその階梯を踏み外し、対抗文化に片足を踏み入れる。彼らはそのリテラシーを用い、暴動では演説をはじめとする独自の役割を果たすが、一般的な男性労働者との協働は続かない。なお、都市暴動に占める学生の多さは同時代的に見て日本特有の現象であることが、アンドルー・ゴードン氏によってかつて指摘されており[2]、本章はその背景説明ともなっている。

第七章「米騒動とその後の社会」では、当該期最後の大規模な都市暴動となった米騒動と一九二〇年代初頭の労働運動が、主に第五章・六章の分析成果との関係において論じられる。東京の米騒動は、先行する都市暴動とその特質を同じくし、吉原遊廓の襲撃に見られるように、米価高騰と直結しない、男性労働者が抱えこんだ疎外感や承認願望の噴出をともなうものであった。また、都市暴動の終息と相前後して本格化する労働運動は、その規律化への志向ゆえに少なからぬ男性労働者を遠ざけたものの、対抗文化の中核たる「男らしさ」は激しい労働争議において彼らを奮い立たせる効果を発揮したという。ただし総体的な流れに対する著者の見解は、秩序化に向かう社会のなかで、対抗文化に根ざした行為が日の目を見る機会は減り続け、男性労働者の鬱屈は個々の身のうちに沈潜していったというものである。

本論部分の最終章たる**第八章「朝鮮人虐殺の論理」**は、男性労働者たちの暴力が、政治的・経済的な強者ではなく、彼ら以上の弱者へと向かう瞬間をとらえた章である。本章では裁判記録にもとづいて、東京府南葛飾郡南綾瀬村での朝鮮人虐殺発生プロセスが克明に再現される。殺害を実行した自警団のひとつは、同村に移住して間もない土工グループにより構成されていた。一つ間違えば自身が攻撃対象となりかねないという恐怖が殺害行為の一因をなしたこと、また彼らの義侠心は、状況如何によって朝鮮人の殺害にも保護にも向かうものだったことを、著者は指摘する。

終章「都市暴動そのゆくえ」では、各章の議論がまとめられたうえで、本書が「社会に沈殿した、日常的には表面化し得ない民衆の情念やエネルギー」を描出する試みであったことが、改めて確認される。

三

以上が本書の概要である。本書における都市暴動とは、政治的には非有権者を含む「民衆」ないし「国民」が政治主体として発見される一方、経済的には下層労働者がさらなる分解を遂げつつあるという、二〇世紀初頭の日本を飲み込む変化の結節点に生じた現象である。政治・生活実践の規律化を促す普選・労働運動が、都市暴動の主体を排除し遠ざける性格を有したという見解は、先行研究における都市暴動と普選・労働運動の関係づけとは明確に異なる。そしてこの議論の説得性と射程の広さを支えるのは、〈暴れる民衆〉を〈暴れる若い男性労働者〉に絞り込んだことで捕捉可能となった、「男らしさ」を中核

とする放蕩的生活実践であった。本書を通読した読者は、序章における問題構成や各章の配置が、いかに周到になされているかを知ることとなるだろう。これと並んで、議論の各所で認められるのは、物事の両義性、不定形性、刹那性に対する、著者の一貫した視線である。主流文化への反逆姿勢によって維持される矜持と深まる孤立、時としてより周縁的な存在に向く暴力、暴力行使のきっかけをつくり出す権力関係の揺らぎ、といった諸局面をめぐる描写は、その好例といえる。

本書から得られる示唆は多岐にわたるが、ここでは敢えて一つに絞り、人と政治の関わりを、明示された政治的要求から離れた地点で掘り下げる際に、本書がとったアプローチを挙げたい。

本書では、運動の組織者が掲げた政治的要求と、組織対象者の政治実践の同一視が、まず厳しく退けられる。政治運動の組織者と組織対象者（あるいは「指導者」と「大衆」、本書の表現によれば「政治集団」と「民衆」）の峻別自体は、とりたてて珍しい操作ではないだろう。しかし後者の政治実践について、そこに前者が代弁し切れない政治的要求の萌芽を読み取ろうとするのではなく、権力関係の揺らぎを衝いて噴き出す暴力という実践の形態自体を問題とし、かかる形態やそれを用意した「強烈な承認願望」を日常生活のなかに見出すとなると、話は別である。少なくとも戦前日本の政治について、こうした角度から光があてられることは殆ど無かったといってよい。

かかるアプローチの効果は、本書の主役が代弁の対象から容易にはじき出されてしまう周縁的存在であるだけに、とりわけ鮮烈に表れている。しかし評者の関心に引きつけて述べれば、本書が示した視座は代弁の対象に含まれてきた階層の動向をたどる際にも同様に重要となろう。彼ら中上層の人々を捉えるのは、疎外感と表裏をなす承認願望ではなく、承認喪失への不安や承認強化への期待かもしれない。しかしそれもまた、社会的存在としての個人が世界に居場所を求めて抱えこんだ希望や鬱屈の、まぎれもない一部である。こうした感覚の特質やその変転を歴史的に検討し、公共性や共同性を標榜しつつ進む活動との相互作用を問う作業は、政治史研究の課題として、より広く取り組まれるべきであるように思う。明治期における「慈善」、あるいは戦間期以降の「生活」のような、政治史・社会史両分野から注目されている概念についても、かかる視座に立って理解を深めることができれば、その実りは決して小さくないだろう。

一方、内的世界が焦点化されている以上、さらに踏み込んだ考察に接したかったのが、暴動の季節は暴力行使の主体が社会に向ける視線をどのように変化させたのかという問題である。

暴れる民衆に直面した政治集団・組織の反応は、暴動が発生し、利用され、抑止ないし組織に組み込まれていく過程として、第三章および第四章において鮮やかに描き出されている。しかし、暴れた者自身の変化については、意外なほど本書中の言及は少ない。「沈潜する「噴火熱」」という迫力ある展望が本書末尾で示されているものの、叙述の位相が本論部分と異なることは否定しがたいだろう。日常を突き破って暴れることでにわかに世間の注目を浴びた男性労働者が、あるいはこうした視線を意識し始め、あるいは新たな政治的役割を与えられた時、社会と自己の関係づけ方はどのように変わっていくのだろうか。

この点を掘り下げるための手がかりは、一九一〇年代末から一九二

〇年代にかけて生じた新たな動きとして、すでに本書のなかに埋め込まれているように思う。第四章では、大日本国粋会に代表される、末端に男性労働者を組み込む右翼団体の叢生が指摘された。第七章では、激しい労働争議において「男らしさ」が果たした作用が観察されている。その方向性こそ対照的なものの、刹那的な暴動とは異なるかたちの政治実践へと足を踏み出しゆく男性労働者の中に、新たに内面化された世界観や脅威のイメージ（「資本階級」にせよ「危険思想」にせよ）を予想することは、そう強引ではないだろう。彼らが育んできた対抗文化的な価値体系は、一種の政治意識が形成されていく過程で、どのような役割を果たし、同時にどのような影響をこうむったのか。〈日常の生活空間〉と〈非日常の政治空間〉の間に茫洋と広がる〈日常の政治空間〉の歴史的変化を考えるためにも、著者のさらなる分析にふれたい点である。

以上、内容の要約を踏まえて、本書から受けた示唆と疑問を述べてきた。いずれにせよ本書で展開されているのは、権力構造に絡み取られつつ生き抜く人間の苦さと力強さへの視線に貫かれた、濃密な歴史叙述である。本書がさらに多くの人の手にとられることを望む。

（二〇一五年、有志舎）

註

（1）二〇一八年一月までに発表された書評について、以下、評者と掲載誌を発表順に掲げる。加藤千香子（『ジェンダー史学』、第一二号、二〇一六年）、藤田貴士（『人民の歴史学』、第二〇八号、二〇一六年）、中筋直哉（『大原社会問題研究所雑誌』、第六九三号、二〇一六年）、兼子歩（『女性史学』、第二七号、二〇一七年）、能川泰治（『歴史評論』、第八〇五号、二〇一七年）、大門正克（『民衆史研究』、第九三号、二〇一七年）。

（2）アンドルー・ゴードン「戦前日本の大衆政治行動と意識を探って—東京における民衆騒擾の研究（一九〇五～一九一八年）—」（『歴史学研究』第五六三号、一九八七年）二〇頁。